

「目にたよるな」 ～目をつぶって考えよ～

ヨハネ9：1～41

私たちは目から多くの情報を得ています。目を閉じた時に得る情報だけで判断すると、「自信のない」答えとなりがちです。目で得ている情報は私たちが判断するにとっても重要な役目を担っています。食べ物を目の前にした時、食べる前から大体「このような味」と想像していませんか。それに対して食べた時の味が予想よりも上回っていたり、下回っていると判断したりします。子どもの口に食べ物を入れた時に、初めて食べるものなどは、口から出して見ます。それからもう一度口に入れてあることがあります。これは自分の舌で判断したのではなく、目で判断しているからです。人間は目を開いていると、目から入っている情報の処理で脳の7～8割程度を使っています。ですから何かを思い出そうとする時、ほとんどの人が目を閉じて考えたり、目の動きを止めて一点を見つめるようにして考えています。これは目が開いていると目から入ってくる情報が多いために脳の記憶している部分から思い出すことができないからです。目から見える情報は私たちが判断するためにとっても重要な影響を与えます。以前もバイオリジカルモーションという事を取り上げました。話している相手がどのような人なのか、そしてどのような気持ちや感情で伝えているのかなども私たちの目で見て判断しています。私たちの目から入ってくる情報によって判断しているため、私たちの目が正しくないと私たちの判断基準が狂ってしまいます。三日月を思い出して下さい。今思い出せたのは以前に教えてもらったからです。三日月とは月と太陽と地球の位置関係で、私たちが月をどのようにみえるのかを表現しただけです。私たちの目が狂ってしまっていた場合、私たちが判断し行っている事が誤ってしまいます。写真だけを見て判断できない時は、写真に文字情報が加わることによって信憑性が高くなり、100%信じてしまいがちです。しかし私たちは聖歌「見ゆる所によらず」のように、見ているものに頼らず、目に見えないものによって歩いていく必要があります。見えないものを見るためには、心の目でみていく必要があります。(ヨハネ9：1～41)ここではいろいろと人間臭い発言が多く見られる記事です。信じた人、信じなかった人、疑った人、疑わなかった人など様々です。そして仲間同士でも分裂が起こってしまったところ(ヘブル11：1～3)神が天地創造した時は何か見て創造したわけではありません。言葉によって創造しました。神はそれを見て「非常に良かった」といわれました。すなわち創造したものをチェックする時に目を用いました。その物体を信じるために目を用いたではありません。(ヨハネ9：8～9)その人を目の前にして、癒された本人であると言った人と、似ているだけと言った人はどちらも過去か、現実をみている人であり、なぜ癒されたのかという事を聴いている人はいません。(ヨハネ9：15～16)今度はパリサイ人が質問しています。パリサイ人は安息日というのは行動してはいけない、何もしてはいけないので、癒しもしてはいけないと教えていました。その偏った教えに則り安息日に癒しを行うことは神から出たものでないと判断しました。ある一方では奇跡を行えるのは過去に殺してきた神の預言者と同じでイエスも同じではないかと思った人もいました。今日の登場人物の中で、目の前の現実を見ずに、目を閉じて神さまと祈った人は書かれていません。彼らは過去か、今か、今までの経験に基づき判断をしていました。(Ⅱテモテ3：1～5)このように人はうわべを繕うようになり、中身に関しては何も関心を持ちません。先生と呼ばれる人は見た目には注意しますが、見えないところや心の中は分かりません。私たちは焦ってしまうと目の前に現実だけで判断をしてしまい、誤った行動を起こしてしまいます。そして自己制御する事ができなくなります。新約聖書にはパウロという人物がいます。パウロはサウロと呼ばれ、熱心なパリサイ人でした。クリスチャンを見つけては投獄するよう人でした。(使徒9章)サウロがイエスキリストと出会った事が書かれています。その中でパウロは目は開いているが何も見えない状態になりました。それは目が見えていたら神の声が聞こえないからでした。サウロにとっては目で見えること、人に見られている事が大切でした。導かれた所でアナニアというクリスチャンに祈ってもらうことによって目が開かれ、見えるようになりました。そのほかにも聖書にはロトの親子を救うために家を囲んでいた町の住人に対して目を見えなくしました。私たちは目で見えたことしか信じれないトマスようになっていないでしょうか。しかし目で見えなくても心の目で判断していきましょう。①心の目で見る。ヨハネ9章に出てきた人物は目の前に起こったことについて目を閉じて冷静になり、神に祈った人はいませんでした。ここに出てくるユダヤ人、パリサイ人は神を信じていた人たちでした。癒された人も癒しを行ったイエスを誰であるのかは分からないが、罪人という事を神が聴かれるのだろうかかと心で感じた事を話し、今まで聞いてきた事により預言者ではないかと伝えました。そしてもう一度イエスの前に来た時に、心で感じた通りであったために主を信じるようになりました。癒しを受けた人は他の人と違っていました。それは癒された事や会話を受け入れようとしていたということです。目で見ることでは判断しなくなるとイエスキリストを信じている人であっても同じように失敗してしまいます。私たちは心の目で見ていく必要があります。人の悪い言動だけで判断をしてはいけません。相手の心を見て冷静に判断をしていきましょう。「また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるよう。(エペソ1：18～19)」パウロは変化しました。クリスチャンを見つけては迫害をしていましたが、目を閉じて考えた結果として「目に見えることに希望をおいてはいけない」とこの言葉をエペソの人々に送る事が出来るようになりました。②見えないものをみる。人のうわべだけを見てはいけません。その人の心にある素晴らしいものをみないといけません。良いところをみていけば、悪いところを直すだけです。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(Ⅱコリ4：18)」見えないものを見ていかないといけません。そうしなければ、見えるものに望みを置いてしまうからです。しかしそれをしていくと、目に見えるものを失った時に傷つきます。気づいたときには取り返しのつかない状況になってしまいます。③見ていないものを望む。(ローマ8：24～26)「目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。」私たちは目に見えているものがあるときはそれ以上の望む事はしません。見ているからです。これでは成長がありません。目で見ているものに希望を置く事ができません。それは目で見ている事は良い事ばかりではないからです。悪い事も多くあり、良い事だけを見ることはできないからです。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。(ローマ8：26)」私たちは目に見えない事を望んでいる時にはどのように行動すればよいのか分かりません。だから御霊は私たちのためにとりなしてください。目に見えるものばかりに捕らわれている人には御霊はとりなす必要がありません。これはとても重要な内容です。目の前にあるものを願っている場合、自分の考えを自己中心に祈ってしまうかもしれません。目で見える願いはその祈りさへも決め付けていることが多いからです。しかし、信仰によって目に見えないものを願っている場合、御霊様がとりなして下さるのです。今日、私たちが目でみて、大事に思っているものから目を離さないといけません。目で見えているものに執着している時に、目で見えないものを得ようとは思わないからです。そして目で見える不足が目に向いていくのです。私たちはイエスキリストの元に出て行き、まずは目で見えているものから目を離しましょう。そしてうろこのようなものが目から落ちた時に、今まで見ていたものが違っている事に気づきます。神の元に出た時に、私たちの見るべきものに気づいていきます。心の目を通して見た時に、本当に必要なものは何なのかが見えてきます。目を閉じて、心の目で見ていきましょう。(要約者：平澤一浩)